

【研究ノート】

金子洋文と土崎一出郷者がもたらした文化

Cultural influences that Youbun Kaneko has brought to Tsuchizaki

天雲成津子

TENKUMO, Setsuko

キーワード：出郷人；金子洋文；ふるさと；文化支援

Received: 2015. 12. 1

はじめに

金子洋文（本名：金子吉太郎、1894-1985）は、明治27年、秋田県南秋田郡（現在は秋田市）の土崎港町に生まれた。大正10年、反戦を主唱する雑誌『種蒔く人』を土崎港町で創刊した同人のひとりである。この雑誌をきっかけに、文学と社会思想の運動が結びついた、プロレタリア文化運動が興隆する。この運動は、政治意見の対立からの集合離散や、戦時体制に向かう国家の弾圧激化もあって衰退した。金子はそのような状況にありながら、大正・昭和の戦前・戦中・戦後の半世紀以上を文学・演劇界で第一線での活動を続けていた。

戦後の第1回参議院選挙全国区に日本社会党公認で立候補し当選、ユネスコ総会には、日本政府顧問として初参加した。労農大学の学習誌『まなぶ』の巻頭言を長く書き続け、夏期秋田労農大学の終身講師として毎年、講義を行っている。彼には、社会主義と関わり深い文化人であるというだけでなく、出身地との繋がりが色濃い活動が見受けられ、社会党系プロレタリア運動のみで捉えきれない人物といえる。その活動には、都会の様子を郷里に伝えるだけでなく、郷里の文化を都会に発する文化の双方向性が見られるのである。

近代日本で多く登場した、郷里を出て都会で活躍した文化人たちの一人である金子洋文は、自らの拠り所である文化活動によって、郷里に何を提供し、郷里はそれをどう活かしたのか。ここでは、文化発信という観点に立って彼の活動を捉えることで、出郷者が郷里にもたらす文化活動、その意味を考えてみる。

1. 金子洋文ゆかりの唄

金子洋文の故郷ゆかりの仕事では、作詞家・作曲家としての金子に着目したい。金子によるふるさとゆかりの唄は判っているもので3曲あり、このうち2曲は、数十年をへた現在でもよく歌われている。

「ハタハタ音頭」は、金子が作詞し、小松平五郎が作曲した。この音頭は、昭和9年2月11日の東京の県人会ハタハタ会で披露された。日本のモダンダンスの先覚者である石井漠（本名：石井忠純、1886-1962）に、その前日に振付けを依頼し、当日に金子らによる踊りを加

えて発表された。

昭和14年ころに作詞、作曲したという「港の唄」は、新民謡という分野に位置し、現在も港の唄全国大会が毎年春に催され、歌われ続けている。新派が昭和31年12月の新橋演舞場で金子の演出になる戯曲『鰯』を上演した際には、その劇中で「ハタハタ音頭」と「港の唄」が使われた。

「土崎小学校校歌」は県内小学校でも早く制定されたもので、市川元¹⁾が作曲を担当し、昭和16年2月11日の紀元節に初めて土崎第一小学校の第一体操場で披露された。戦後の改訂を加え、現在も土崎小学校の校歌として歌われている。

1.1. ハタハタ音頭

昭和9年2月25日の『秋田魁新報』は、趣味と家庭欄の紙面を大きく割いて、ハタハタ音頭を紹介している。

都会に農村に何々音頭がすばらしい勢ひで氾濫する。小唄に一番必要なことはローカル・カラーであるが、作詞と作曲と振付の三つが縣人の手に成らないものは、どこかにそぐはないところがあり、中にはレコード会社の営利的な意図から既成の小唄曲にあてはめ、地名なんかも出鱈目なのがあつた。

各地で生活の折々に歌われていた民謡が、レコードをはじめとする新しい伝達媒体の登場以来ひろく全国的に伝えられる機会を得た結果、生活の場面と切り離され、曲という独立した存在になって全国に広がっていった当時の時代背景があつた。ローカル・カラーを小唄に反映させた活動がレコード会社の資本活動と結びついた歌²⁾となっていたことへ違和感を抱く記事であつた。この記事には石井漠の振付けを図入りで紹介していた。

ハタハタ音頭披露を報じたこの記事中には、石井漠の「雷魚音頭に就て」と題した文が掲載されている。以下にその一部を紹介する（下線は筆者）。

二月十一日、東京におけるハタハタ會の前日、小松平五郎君がハタハタ音頭を持つて來て、これを明日まで同（ママ）うしても振付けてくろ（ママ）といふ。そのうちに金子洋文君の代人として大坂君もやつて來た。快よく引受けることにした。そして會のはじまる四五時間前に振付けを終つて會場の「いろは」に出かけた。

ハタハタ音頭の（ママ）作つた理由は、いふまでもなく我が郷土秋田を、大いに日本国内とはいはず外國にまで宣傳しやうといふ意圖に外ならない。その意味で、舞踊の振付けも、老若男女、日本人にも支那人にも容易に踊得るものでなければならない。以上は金子君の意見をそのまま借用したが、私も同感である。従つて、この振付けは、要するに、骨組だけにして、肉だとか、色だとか、味だといふものは、踊る人たちの好みによつて勝手につけて貰ひたいと思つてゐる。

（中略）

ハタハタ會の晩に三十分あまり稽古をやつたがむづかしいむづかしいといひながらも、

金子洋文、福田豊四郎、古野丁一郎君の諸君はいふに及ばず、三浦那輔君までが兎に角踊れるやうになつたから、いかに優しい（ママ）踊りであるかゞ御想像が出来ると思ふ。

下線部で述べられているように、秋田を宣伝しようとして県人会面々に及ぼす金子の影響が感じられる文である。石井は文中、東京で活躍している秋田出身の文化人たちの名やその様子を、郷里の人々にとっても知己の人であるかのように新聞紙上に挙げていたが、多くは金子に近い人物であった。

雷が鳴り大荒れとなった初冬の日本海に、深海から産卵のために接岸する鰯は、「雷魚」「ハタハタ」「はたはた」とも書かれ、秋田の冬を表わす大衆魚である。正月の金子家では神に供えたという、特別な魚であった。東京在住の県人会の名称もこの魚から来ている。鰯鮓や「かやき鍋（大きな貝殻の鍋）」と、秋田の清酒を口にするのを楽しみとしていた金子洋文にとって大切な郷土の味覚であり、秋田を伝えるものとして、自らの作品に登場させ、秋田を舞台とした表現を行っていた。

昭和5年から9年にかけて東北地方は昭和東北大飢饉に襲われていた。昭和7年2月には、非合法とされていた共産党員であったプロレタリア作家、小林多喜二が築地署で虐殺され、7月『文芸戦線』が終刊している。昭和8年は、共産党員の検挙と転向が相次いだ「転向の時代」が始まった年である。暗い時代にこそ庶民へ明るい話題が求められていくのが自然な流れとすれば、娯楽の需要は増していくことはあれ、減ることはなかったといえる。

1.2. 秋田 港の唄

故郷の海や漁師をイメージして作詞、作曲し、新民謡では珍しく定着している民謡として、昭和14年ころに作詞、作曲したという新民謡「港の唄」がある。金子と親しい土崎の海禅寺住職の藤田溪山³⁾が中心となって、「港の唄」をキングレコードに吹き込んだことがきっかけで、広く世に知られるようになった。港の唄に関しての藤田の金子宛書簡が数々見受けられる。浅野梅若⁴⁾と電話でレコード化について話しつつ、県内の歌手がいいという自身の意見を伝えていた⁵⁾。土崎では、「山崎沸茶作詞、藤田溪山作曲などという人も出ている」と周りの様子を伝え⁶⁾たり、すでに流布している歌の歌詞を変えさせることの難しさを述べている⁷⁾。昭和39年3月8日付けの書簡では、コロムビアでこの唄を女性歌手で吹き込みたいと申し出があったと伝えていた。

この民謡の歌詞は、後から定まったもので、海で父と母を思う情景から、海の厳しさと豊かさと伝わり、自然と向き合って生きる人の思いが映し出されている。厳しい冬が明けた春を伝える北海道からの鯉船、鷗とはまなすは、土崎の海に多く見られた風景であった。土崎を単に港と呼んでいたことから、歌の題も港の唄とシンプルなものであった。

金子が子供のころの伝馬船を漕ぐ時や、引き船の時の掛け声、「ホーラホー サーノサー」というメロディーをくちずさんでいるうち、自然に曲想がまとまったと後述している。彼の中にしみ込んでいた、櫓をこぎ出す音とリズムが掛け声となって現れたこの唄は、晩年、興が乗ると、櫓をこぐ手つきと合わせながら歌われていたという。

毎年4月に土崎港町で開催される「秋田 港の唄全国大会」には全国から民謡の歌手達

が集まり、現在も愛唱されている。

1.3. 土崎小学校校歌

金子洋文が故郷にのこした歌の中で、郷里の人々が最も身近に歌っているといえる土崎小学校校歌について紹介する。

金子の遺した資料から、彼が折にふれて詠んだ句を手帳などに記していたことがわかる。彼は戦後20年を経た頃、それまで保管していた句を整理し「句と歌と感想 (1)」と記された市販のノート (B6版 KOKUYO NOTE、21×15.5センチ) にまとめている。その前半は万年筆でいっきに記され、後半はボールペンで記されている。表紙上段には、「句と歌と感想 (1)」と表題が書かれていて、下段には金子洋文と署名がなされている。ここに書かれた句は、昭和55年1月1日から3月2日まで『秋田魁新報』に19回にわたって連載された「俳句随筆」に活用されている。そして「俳句随筆」に掲載されたものから、句だけを抜き取って編まれたのが、金子洋文米寿記念刊行会編集の句集『雄物川』であった。

過去に記されたものを整理し、のこすべきものを再度書き写したものであることはその整然とした書き振りから明らかで、書き写したものに、自身で校正やコメントを書き加えていた。50頁余のノートには、句や詩、さらには歌の歌詞が書かれ、最終頁まで使用されていた。

その最後の頁に書かれたものが、土崎小学校の校歌である。金子にとって土崎小学校は『種蒔く人』を創刊した小牧近江、今野賢三等と学んだ母校であり、更にこの母校で代用教員を務め多くの教え子と出会っていた。この校歌の作詞は、金子自身であり、作曲者も彼の縁であった。

金子のふるさと秋田に寄せる思いが伝わってくるこのノート構成から、土崎小学校校歌をもって終わりに配置しようとしていたこと、(やがてこれを母体とし生まれる句集の表題が「雄物川」であることも含めて) その目的が、自らの故郷への思いを伝えようとするものであったことがわかる。

校歌は、「紀元二千六百年」の記念事業として金子洋文作詞、市川元作曲で昭和15年に制定された。昭和16年2月11日の紀元節に初めて第一小学校の第一体操場で披露された。

戦前の歌詞は昭和24年、民主主義の時代に歌詞の一部がそぐわないとして金子自身の手で修正された。変更箇所は以下の通りである。(旧) 霊峰→(現) 名峰、(旧) 教えのみことかしこみて→(現) 学びの庭にきょうも集いて、(旧) 学びのみにち→(現) 教えの道に。(旧) 勤皇秋田→(現) 文化秋田の、(旧) 御物川→(現) 雄物川、(旧) 皇国の→(現) お国の。(旧) やまとだま→(現) 港魂、(旧) 五つの海→(現) 自由の海。

土崎小学校校歌

(1) 明けいく空に 太平の

名峰仰ぐ わが校舎

学びの庭に きょうも集いて

教えの道に いそしまん

- (2) 文化秋田の 血をうけて
末かわらじと 雄物川
清き流れに さおさして
お国のために つくさばや
- (3) 北荒海の 日本海
吹雪にきたえし 港魂
さかまく波に 帆をあげて
自由の海に こぎいでん

2. 土崎港町を描いた作品群

金子洋文は土崎を舞台にした作品を、多くのこしている。それも少年時代を過ごした当時の土崎港町を伝える作品で、自ら「古川町モノ」と銘うっていた⁸⁾。小説「鯡」、「鷗」、「可哀さうな銀子」、「俘虜」、「貉」、「山羊と赤い手拭」、「少年の抗議」他、大正13年刊行の『鷗』に収録されたものが多い。関東大震災の年の夏、土崎で「鯡」を、震災下の東京における虐殺行為を告発した『種蒔く人』号外を発行した後、9月12日に秋田入りし、鷹の湯温泉で自炊しながら「鷗」、「可哀さうな銀子」、「蛇の戯れ」、「狼」を書いている。

方言・登場人物・町の様子に、土崎港町の描写が細やかにこめられている。その数編に登場する人物には、船長、売春婦と、金子と思しい元気いっぱいな少年の姿がある。『鷗』からその冒頭文を紹介する。

私の郷里は秋田県土崎港町である。私は船夫や、仲士や、色女などの住んでゐる川端の古川町に生まれ、そこで育つた。

母は聡明だが父は愚鈍である。自分は母も好きだが父も好きである。朝、仕事にかかる時、私はしばしば父の温顔を思出す。

父は学問がきらひでかしき（船の小僧）となつた、船夫となり、艇艚乗となり、やがて附船問屋を始めた。艇艚乗り時代、私は古川町で生れた。ここに集めた作品の大部分は、私が生れ、育つたその町の人々をかいたものである。（中略）……鷗とは生地をシンボライズした書名である。

時を経た昭和 34 年に発表された戯曲「雄物川」でも、雪という気のいい売春婦を中心に自らの少年時代を過ごした明治 40 年頃の土崎港を舞台にした世界が描かれている。

それまでの俳句を振り返りながら、「俳句随筆」を連載し、さらに、それらをとりまとめた句集『雄物川』を87才の時に刊行している。雄物川という題は、金子にとって特別な意味を持つ。少年期に過ごした家のすぐ前を流れる雄物川を日々、身近に眺めていた。船の往来を生活の糧に生きる土崎港町、その地に住む人々の暮らし、川と人の情景が彼の裡に離れがたく結びついていて、いわば金子の原点である。戯曲に続き、かなりな高齢となった金子が、己の句をまとめ刊行した、唯一の句集に「雄物川」という大切な名を付けたこ

との意味は、自らの原点まで遡って著したことを伝えている。

3. 土崎での文化人脈

土崎は文化的活動が見られる地であるが、金子洋文は郷里の友人、金子雄二（1896-1992）⁹⁾をはじめ、土崎に縁がある多くの文化人たちとの繋がりをもっていた。

詩人、歌人の金子タ二（本名:金子雄二）は、金子洋文の若い頃からの友人で、終生交流があった。代用教員時代の金子は、同人誌『白樺』を彼から借りて読むことができたという。金子タ二が中心となり極光詩社が編集したA5サイズ10頁ほどの同人短歌誌『極光』には、金子はもちろんのこと、富田碎花の「放浪哀歌」を始め、武者小路実篤からの文が寄せられている。

「港の歌」を歌い、そのレコーディングに貢献した藤田溪山については、前述した。

脚本家・演劇評論家として活躍していた野口達二（1928－1999）は『季刊歌舞伎』を責任編集し、昭和43年7月から昭和53年4月までの40号を歌舞伎座出版部から刊行した。金子から受けた支援への感謝を述べた昭和38年4月8日付け書簡からは、脚本を発表する前に金子から見てもらい、指導を受けていたことを記していた¹⁰⁾。彼は土崎の名家、野口家の出であったが、同じく野口家の血縁者に、金子からの支援を受けた杉田瑞子（1929-1975）がいる。

杉田は、秋田市土崎港町にあって地方同人誌で活躍していた女流作家であった。土崎ならではの作品も多く、地方都市に住む女性の感性で描かれていた。子育て中の主婦であった杉田が、当時の秋田で広く認知されたのは、彼女の作品が芥川賞候補となったことが大きい。その作品「北の港」が昭和43年上半期の第59回芥川賞候補となった背景には、金子の援助があった。後に金子から杉田作品を読んでみるよう言われたと、当時芥川賞の選考委員であった石川達三が明かしている¹¹⁾。

いずれの面々も金子との関わりによって、中央との文化活動の橋渡しの機会が増していたといっている。ここに取り上げた人たちは、彼の人脈の一部にすぎない。

おわりに

金子洋文が亡くなった際、同郷の後進劇作家の野口達二は金子の生き方を評し“港衆”、それも「最後の港衆」としたのであった。土崎港町には、土崎港に関わる人の生き方をあらわす「港衆」という言葉がある。これは海に開けたこの土地特有の表現であったが、港衆は金子だけでない、まだほかにもいると土崎の人たちからの異議があったことへ、単に港に住むだけではなく、外で益を得てその益を港で分け合う人をこそ港衆というのであるとしていた。野口は次のように書いている。

ひとりで文学・演劇の大海に漕ぎ出し、他人の力を借りずに他国で働きを見せ、港に戻っては文化のうるおいをもたらし、後輩にその刺激を与えるなど衆に分った港衆の中

の“港衆”（野口達二「洋文さんと“港衆”」『みなと祭りのしおり』¹²⁾）

外へ出て稼いでその地での恵みを得、その成果を故郷にもたらし、出郷者としての生き方を意味しているといえる。金子洋文は典型的な「港衆」として己の港との繋がりを保ち続け、文化活動で地方と都会という空間をつないだ人であった。彼の郷愁は、船の往来を生活の糧に生きる明治の土崎港町、その地に住む人々の暮らしであり、川と人の情景であった。金子の故郷、土崎には馴染み深い人々が居り続けていた。出郷者が己のルーツを保ち続けるには、その繋がりを保つための環境、努力が必要である。このことを考えると、野口の言葉にあった「最後の港衆」という言葉がなんとも意味深長である。

新しい港衆に必要なものとは何か。それを知るためにも、出郷者のもたらす文化という観点から金子が生きた時代、彼の生き方を見直す意義はあるといえよう。

本稿は、先に発表した拙稿「金子洋文の研究」¹³⁾を基に新たな見地から書き著すことを試みたものである。

註

- 1) 作曲者の市川元は山田耕筰の弟子で、新築地劇団で音楽を担当、プロレタリア唱歌「少年劇団の歌」を作曲している。彼はその後、徴兵され若くして亡くなった。（金子洋文の息女、金子功子氏による）
- 2) 秋田を宣伝するために作られた「ハタハタ音頭」も、昭和12年2月に音丸の唄で、コロンビアでレコード化されている。
- 3) 藤田溪山（1903-1984）は秋田で自らこの歌を数多く歌っていた。唄は即興性もあり、金子の歌と同じでない箇所もあった。
- 4) 浅野梅若（1911-2006）は、秋田市出身の民謡歌手、三味線奏者で「民謡王国・秋田」を確立させた。日本民謡界の大御所である。
- 5) 昭和36年6月4日付け藤田溪山から金子洋文宛て書簡より
- 6) 昭和37年3月30日付けの藤田溪山から金子洋文宛書簡より
- 7) 昭和37年4月11日付け藤田溪山から金子洋文宛書簡より
- 8) 金子洋文「郷土を語る―「古川町モノ」の新しい発展を」『秋田魁新報』（1932年1月13日）
- 9) 『極光』は大正5年11月創刊、3巻まで刊行確認。彼は若いころから金子洋文の東京での活躍を応援し続けていた。芸術座が秋田で公演した際〔演目は『サロメ』（松井須磨子のサロメ、澤田正二郎のヨカナン）、中村吉蔵の『飯』〕、同行した友人が金子雄二（夕二）である。（金子夕二「洋文氏の秋田での演劇について」『悲劇喜劇』31巻7号、早川書房、1978年）20-21頁。金子洋文は、自分の劇が上演される際は、夕二を招待すると約束したという。この約束は果たされた。後に金子洋文の戯曲「剣」が澤田正二郎の新国劇で初演された際に彼を招待している。
- 10) 昭和39年5月14日付け野口達二から金子洋文宛書簡
- 11) 「杉田瑞子略年譜」中には、「第五十九回芥川賞候補作となる。金子から芥川賞選考委員石川達三への推薦」とある。千葉三郎「杉田瑞子略年譜」『文芸秋田』杉田瑞子追悼号第24号（文芸秋田社、1975年）18-20頁
- 12) 野口達二「洋文さんと“港衆”」『みなと祭りのしおり』（土崎経済同友会、1984年）10頁
- 13) 「金子洋文の研究-その文化活動から-」筑波大学博士学位論文（甲第7154号）、（2014年）

